

いる。従つて正切り後残葉に附いている皮付丸太は約3ヶ月を経しても殆んど乾燥して
 いない事が予想される。又Brow氏に依ればアメリカ北部の針葉樹の剥皮材の重量は
 400kg/m²で皮付材は538kg/m²であるが剥皮する事に依つて重量は約74%に減少している。
 本結果では約68%で大体似値を示している。

竹片の繊維方向圧縮に於ける破壊面の角度

九州大学 太田 基

I 緒 言

木材の繊維方向圧縮試験に於て試験片に生ずる破壊面の角度に關しては既に2.3の発表
 があるが竹片に關しては未だ発表されて居ない。竹片は木材の1年輪とも看做し解られ、
 又換言すれば木材は竹片を重ね合せたものとも見られる。従つて竹片の破壊状態は木材
 のそれに類似するものと推想される。従つて竹片の繊維方向圧縮試験を行つた後に觀察し
 た結果を発表する。

II 実験材料及び方法

材料はマケケ及びモウソウチクで方法は従つて竹材の性質に關する研究第1報と同じであ
 る。試験片は全徑壁を有するもの、外半部、中間部及び内半部の4種類とした。

III 結 果

繊維方向に圧縮された場合、竹片の破壊状態は木材と殆んど同様に半径面に傾斜する明
 瞭な破壊面を生ずるようになる。併し乍ら木材の破壊面は各面共に殆んど同時に形成す
 るが全徑壁竹片では外皮層に先づ破壊線を生じ順次内皮層に向つて破壊面が進展し、最
 後に内皮層に達して完成する。これは鈴木(水野)の試験に於て認めた事實と一致する。上
 述の正切り破壊面は第1表示すように外半部、全徑壁及び中間部の試験片の殆んどに現れ
 るが内半部の試験片には殆んど出現せず認められた。

第1表 結 果

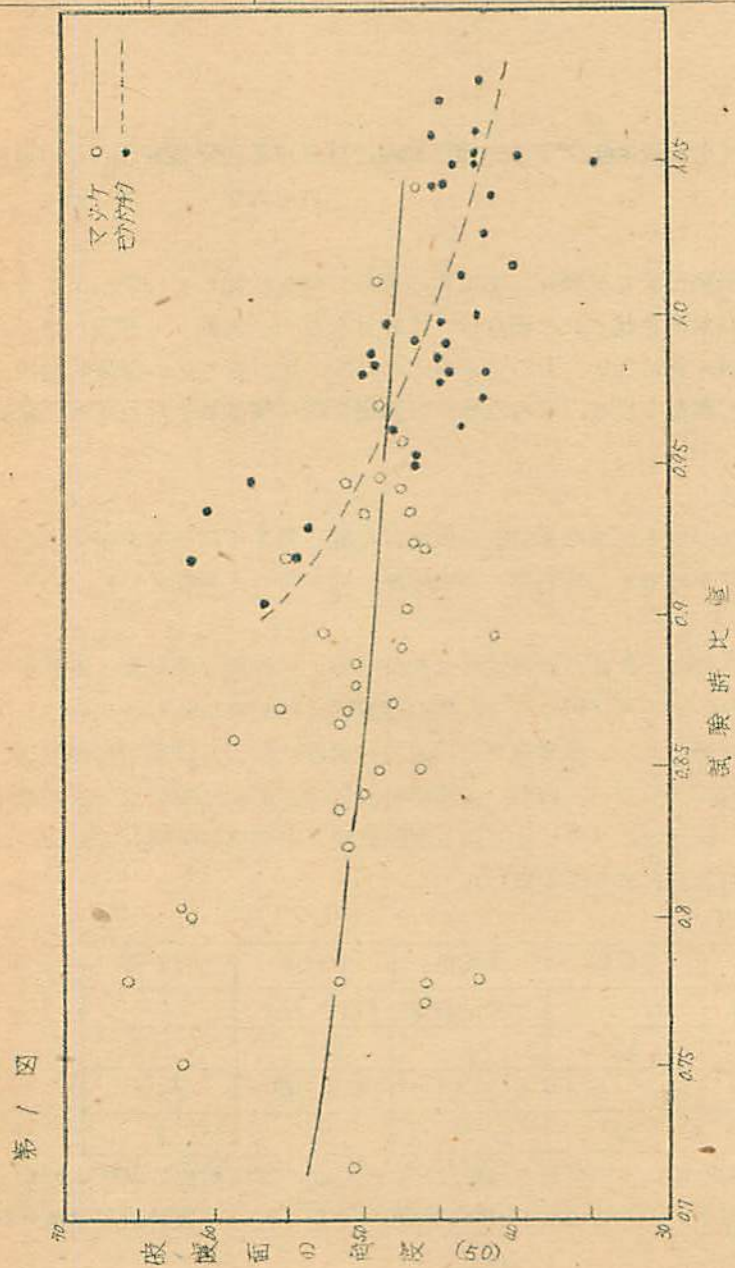
種	類	全徑壁	外半部	中間部	内半部
マケケ	角 度 (°)	46.0 ~ 52.5	46.5 ~ 52.5	55.5 ~ 62.0	65.5
	出現率 (%)	85	93	100	7
モウソウ チク	角 度 (°)	42.0 ~ 52.0	38.5 ~ 45.5	54.5 ~ 88.5	59.0
	出現率 (%)	88	100	75	8

竹片の外半部は内半部に対して比重及び強度は共に大である事は同知の事實である。従
 つて破壊面と比重及び強度の間に或る種の關係の存在が予想される。破壊面と繊維方向と

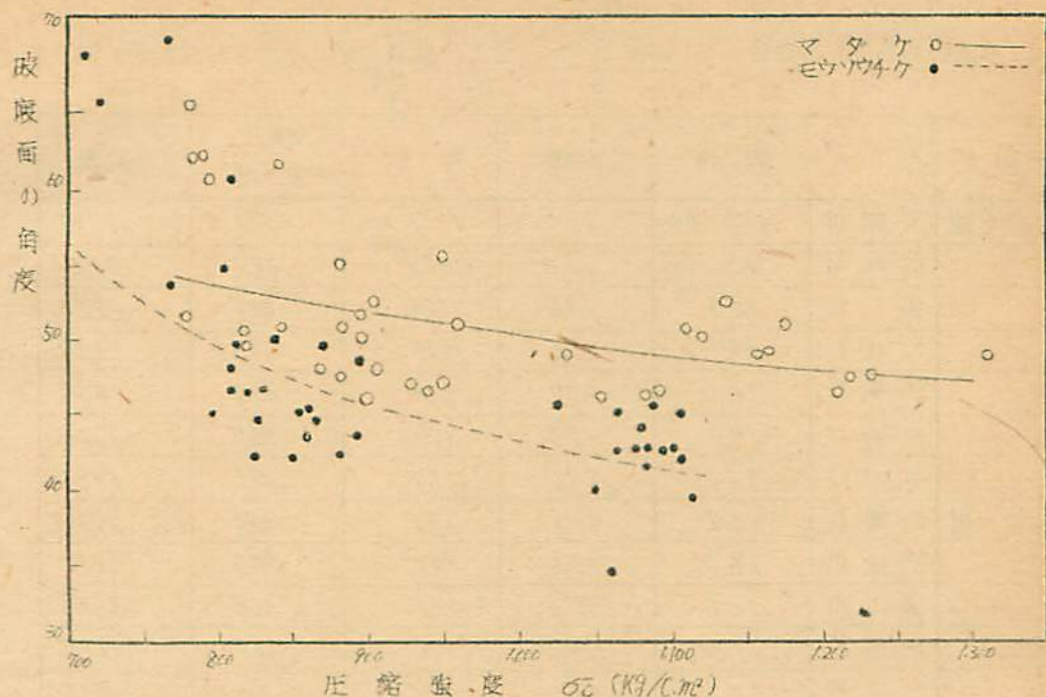
の割合(%)と比重(S)及び強度(σ_c)の関係を求めれば第1図のように双曲線なる関係が認められ第2表の結果が得られた。

第2表 回帰方程式

マタケ	比重	$S/A = 0.0145 + 0.026 (S - 0.873)$
	強度	$\sigma_c/A = 19.4 + 0.025 (\sigma_c - 975.7)$
モウソウチク	比重	$S/A = 0.0220 + 0.0060 (S - 0.999)$
	強度	$\sigma_c/A = 20.3 + 0.035 (\sigma_c - 922.2)$



第 2 図



宮崎県産楠実の品種調査

宮崎大学 重松 義 則

日向の国は旧藩時代小糸令で統一した産葉はないようであるが延岡の内藤次大代藩主の親政守政順(文化3-天保5、西暦1816~1834)は明治江直しのその学向や産葉の奨励を企て彼の五條目という布告を発し、歴教廻りに茶桐杉竹等を植之領内全般の空地に植を植之植効力と稱する役人を置いて奨励監督に巡回せしめたことにより鉄肥糞も同様に植効を奨励したようで縣下各地に集田的栽培地がかなり多く散在し宮崎市にも「江平堀」と云つて天桐の美田植樹があり、赤松木馬場という長い並木道も残つていて昔の名残を留めてゐる。

昭和16年12月宮崎縣庁より紙用林産物検明令に基づき産葉鑑定と価格設定の基準資料として各地産楠実の品種調査を筆指に依頼されたのであつた。先づ各生産単位組合の集荷場より房込楠実2kgを採取し、それより房長粒箱数は50房を、粒長は10粒を、果皮厚(葉皮)は果実50粒分を供試料とした。合葉率は果皮のみをソクマレーで石油エーテル浸